私のおすすめの本

博士の愛した数式

小川　洋子

～八十分を生きる博士との愛を描いた物語～

To 老若男女すべての今を生きる人に。

From 三岡　広平(PN)

僕は初めてこの本を読み終えた時に、愛の形は様々なんだと思った。

まず、私という人物の過去がこの物語に大きく影響していると思う。結婚できない男の人を愛し、母子家庭で育ち息子を母子家庭で育てた。そして音信不通だった母と息子が小学校へ入学する直前に和解した。そこで私は身近に家族がいることの安心さを実感していたが、突然母は脳内出血でこの世を去る。

こうした過去をもった私が家政婦として博士と生活をすることになる。そして博士の要望で息子も加わりルートというあだ名までつけられ、それはまるで一つの家族のように動いていく。しかし、はじめは八十分しか記憶がない博士に同じ質問を繰り返され、ちんぷんかんぷんな数学の話しをされて、なかなかうまく接しられずぎこちない時間が過ぎていく。だが、時折見せる博士の優しさとルートに向ける温かいまなざしに私とルートはだんだん惹かれていき、私とルートは苦労しながらも毎日を驚きと喜びとともに楽しく送っていく。そしてルートの誕生日の日に私とルートは博士に江夏豊のカードをプレゼントし、博士が数学雑誌過去最高額の懸賞問題を解いたことを祝った。僕はその場面を読んでまるで本当の家族のようだと思った。というより家族のような温かさを感じた。しかし、その夜を最後にもう何も記憶できなくなった博士は専門の医療施設に入所する。その後私とルートは博士が死ぬまで施設を訪問する。物語の最後は、最後の訪問で二十二歳になったルートが春から数学の先生になることを報告し博士の肩を抱き寄せるところで終わる。

僕はこの本の魅力を考えた時に思ったのは、この本は読者によって様々な解釈が生まれるだろうということ。何故なら博士の過去や義姉のことNとは誰のことか、など語られないことが多いからだ。その分、私達読者は想像力を働かせねばならない。しかし、形を変えながらも愛が溢れている作品ということは誰もが分かるだろう。

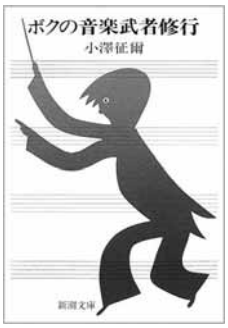
ボクの音楽武者修業

小澤　征爾

～ボクの音楽武者修業について～

To 何かを成し得る為の一歩を踏み出せない人

From 宗形　桃子



日本が誇る名指揮者「小澤征爾」。私たち音楽を愛で、楽器を愛する若者にとって、彼のタクトの下で彼と共に作品を創ってみたいと思わぬ人はいないはず。そんな音楽界のカリスマを創造したと言っても過言ではない、若かりし時代の旅のエッセイである。

二十四歳の時、指揮を学ぶため音楽を知るためにスクーターでヨーロッパを旅する小澤の生活の姿が、家族へ宛てた手紙や、飾らない若者の言葉を通して書かれている。

読んでいるうちに、ここで語っているのは本当にあの世界の小澤なのだろうか？と不思議に思ってしまうほど、飾り気がなく正直で、そしてまたちゃっかりしていて、図太くて…。とにかくおもしろい。色々な国に立ち寄り生活をする中で（美味しいお酒を堪能し、時々綺麗な女性で目の保養もする）、当時そこで見たこと触れたことに対して良いことも悪いこともストレートに書かれている。

勿論、指揮のコンクールやその土地土地で味わった音楽に対する思いも綴られている。演奏技術ではなく人の心が美しい音楽を作る事、音楽にまで陰を落としていく戦争の残酷さが淡々と語られるとき、私の中でも得も言われぬ感情が渦巻くのを感じた。おそらく、語っているのが、素直に感動したり新しい発見をしたり、この時代の現実を受け止める、若い感覚を持った成長途中の小澤の言葉だからなのではないだろうか。

その音楽が作られた土地に行き、空気や自然や人を知る。人コアを読み込みそこから作曲家の思いを受け止める事に通じる。音楽に向けられた思いの大きさを感じる。

何かに対して有り余る情熱を持つ人や、何かを成し得る為の一歩を踏み出せない人に是非読んでもらいたい。彼の旅は常識から外れているし、なかなか真似する事はできないが、きっと面白い指南書になるはずである。私も井の中の蛙にならぬよう、世界を広く見渡し、色々な物を吸収しながら大人になりたい。

（1 | 2　安部　莉永）